CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

長野県立大学リポジトリ
THE UNIVERSITY OF NAGANO REPOSITORY
信州共同リポジトリ
REPOSITORY OF SHINSHU

長野県の年中行事 ： 短期大学生の年中行事の実施状況[研究ノート]

著者	松島 ひとみ，中澤 弥子
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	71
ページ	23-35
発行年	2016-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00001230/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

長野県短期大学紀要　第71号　2016年
Journal of Nagano Prefectural College, No. 71, 2016

【研究ノート】

長野県の年中行事　―短期大学生の年中行事の実施状況―
Annual Events in Nagano Prefecture: Implementation Status of Annual Events for Junior College Students

松島　ひとみ*§　中澤　弥子*
Hitomi MATSUSHIMA and Hiroko NAKAZAWA

キーワード：年中行事、長野、短期大学生、食育、食文化
Keywords: annual events, Nagano, junior college students, dietary education, food culture

1. はじめに

年中行事とは、「年々ある一定の時期がめぐってくると、決まって繰り返し行われる儀礼的なものをいう。その根底に信仰があり、娯楽をともなって発達した歴史的な意味をもつもの」といわれる[1)]。年中行事には、食と関連するものが多く、それぞれの行事にはそれぞれ決められた特別な食べものがつくられたが、これが行事食である[1)]。年中行事は、年に数度のことと、思い込んでいる人が少なくないと思われるが、もともとは、平均すれば約11日に1度のペースで訪れる、生活のメリハリを1年間の中に配分した、苦を楽で補う伝承の動機付けまでが組み込まれた伝承の「年間スケジュール」でもあった[2)]。

日本は四季に恵まれ、その自然や先祖を敬い、神仏、精霊を祀り、四季折々に特徴のある年中行事が発達してきた。そして、自然の恵みである「食」を分け合い、食の時間を共にすることで、家族や地域の絆を深めてきた[3)]。しかし、近年は社会環境の変化や都市化、核家族化等によって若い世代に年中行事が伝えられていない[2)]といわれる。農業の生産方法の変化と農業人口の低下に伴い、農業に関わる年中行事が廃れてきていることが推察される。一方で、クリスマスやバレンタインデーなど海外からの新しい年中行事は、新たに定着している[4)]ように思われる。

そこで、本研究では、短期大学生を対象に年中行事の実施状況についてアンケート調査によって調べ、各種年中行事の内容と実施状況について検討した結果を報告する。

2. 調査対象者および方法

1）調査対象者

アンケート調査は、平成27年度長野県短期大学生活科学科健康栄養専攻1年生、生活科学科生活環境専攻2年生、幼児教育学科2年生を対象に行った。

2）調査方法

アンケート調査期間は平成27年12月～28年2月であり、授業中に調査票を配布し（当日の出席者のみを調査対象とした）、記入後、回収した。無記名による自己記入式のアンケート調査とし、調査項目を表1に示す。表2に示す51項目の年中行事（一部に、行事名以外の行事食名や関連の名称を含む）について、1：やっている　2：かつてはやった　3：やったことはない　4：知らない　5：やりたい　の5つの選択肢から選択する方法で調査した。なお、質問紙中の行事の名称や行事の実施時期が、自分の家庭や地域の名称や実施時期と異なる場合は、その旨、記入するよう、回答時に口頭で依頼した。また、行事食について特に思い出に残っていることを自由記述で尋ねた。

表1　アンケート調査の調査項目

・学科、専攻　・学年　・男女　・年齢
・年中行事をやっていますか
（5つの選択肢からチェックする）
1：やっている
2：かつてはやった
3：やったことはない
4：知らない
5：やりたい
（「知っている」「やったことはない」とみなす）
・行事について思い出を自由記述

＊長野県短期大学生活科学科健康栄養専攻
§連絡先　〒380-8525　長野県長野市三輪8-49-7　TEL 026-234-1221　FAX 026-235-0026

表２　調査した行事名

実施月日	行事名	実施月日	行事名
1 月 1 日	元旦	8 月 16 日	送り盆
7 日	七草	23 日	二十三夜さま（8 月）
11 日	鏡開き	23 日	地蔵盆
14 日	ものづくり	27 日	御射山さま
15 日	どうろくじん	9 月 1 日	風まつり
20 日	二十日正月（みそか）		名月（9 月）
2 月 4 日	節分		お彼岸（秋）
8 日	山の神		二十三夜さま（9 月）
11 日	初午		秋祭り
3 月 15 日	やしょうま	10 月 13 日	名月（10 月）
23 日	お彼岸（春）	9 日	おくにち
4 月 3 日	桃の節句	中旬	かかしあげ
8 日	花まつり	下旬	かまあげ・かりあげ
下旬	春まつり	11 月上旬	とうかんや
5 月 2 日	八十八夜	15 日	七五三
8 日	お薬師	20 日	恵比寿講
第 2 日曜	母の日	23 日	新嘗祭
6 月 4、5 日	宵の節句・節句	12 月 22 日	冬至
第 3 日曜	父の日		餅つき
7 月上旬	祇園祭		松飾り
	土用の丑		おせちづくり
7 月 31 日	孟蘭盆入り		お年とり
8 月 1 日	孟蘭盆		クリスマス
7 日	七夕		バレンタインデー
13 日	迎え盆		ハロウィン
	盆踊り		

3. 結果および考察

アンケートの回収率は、100％（配布数・回収数107）であった。年中行事の実施率の高い順、すなわち、やっている割合が高い順に、表３に結果をまとめる。なお、やっている割合が同じ場合は、かつてはやった割合が高い順に記載した。以下、結果を、日本の行事について、実施月日順に記載し、次に外来の行事について、伝来してきた順、クリスマス、バレンタインデー、ハロウィンの順に述べる。

1）年中行事実施状況について

(1) 元旦

元旦の実施率は、「やっている」の 93％で、経験率は、「やっている」(93％）と「かつてはやった」(5％）を合わせて 98％と高かった（表３)。報告書5）と同様、認知率（「知らない」の回答以外）は100％だった。

(2) 七草

七草の実施率は約４割（38％）で、認知率は 99％と高いが、経験率は約６割であった（表３)。

七草は人日の節句ともいい、「邪気を祓い、無病息災を願い、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロの七草を入れた粥を朝食べる。…地域によってはそこに餅を入れる家もある」[4]とされる。

(3) 鏡開き

鏡開きの実施率は約４割（38％）で、経験率は約７割（68％)、認知率は 95％と高い値であった（表3)。

鏡開きは、「正月の鏡餅を下げて、水菜清汁として食べる祝儀。・・・鏡餅は刃物で切らずに、手または槌で割るのが仕来りで、切るとはいわず、開くとめでたくいう」[3]とされる。

(4) ものづくり

ものづくりの実施率は 5％と低く、認知率も約２割（18％）と低かった。経験率も１割（8％）に満たなかった（表3)。

ものづくりは、「信越から北関東にかけて、正月十四日の夕方などに小正月の削掛・餅花・繭玉など

表３　年中行事の実施状況［人（%）］

n=107

	1：やっている	2：かつてはやった	3：やったことはない	4：知らない	5：やりたい	無回答
クリスマス	101(94)	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
元旦	100(93)	5(5)	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)
バレンタインデー	91(85)	13(12)	2(2)	0(0)	1(1)	0(0)
母の日	87(81)	14(13)	5(5)	0(0)	0(0)	1(1)
節分	81(76)	25(23)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)
迎え盆	81(76)	14(13)	8(7)	4(4)	0(0)	0(0)
送り盆	80(75)	11(10)	11(10)	4(4)	0(0)	1(1)
父の日	74(69)	17(16)	15(14)	1(1)	0(0)	0(0)
お年とり	70(65)	16(15)	10(9)	10(9)	0(0)	1(1)
おせちづくり	64(60)	23(21)	18(17)	0(0)	2(2)	0(0)
冬至	61(57)	17(16)	19(18)	8(7)	0(0)	2(2)
お彼岸（春）	59(55)	21(20)	17(16)	8(7)	0(0)	2(2)
お彼岸（秋）	59(55)	14(13)	20(19)	13(12)	0(0)	1(1)
ハロウィン	56(52)	15(14)	32(30)	0(0)	4(4)	0(0)
土用の丑	51(48)	30(28)	17(16)	8(7)	0(0)	1(1)
松飾り	47(44)	24(22)	20(19)	14(13)	1(1)	1(1)
桃の節句	43(40)	36(34)	17(16)	11(10)	0(0)	0(0)
七草	41(38)	26(24)	37(35)	1(1)	2(2)	0(0)
鏡開き	41(38)	32(30)	28(26)	5(5)	1(1)	0(0)
七夕	38(35)	51(48)	15(14)	1(1)	1(1)	1(1)
どうろくじん	36(34)	35(33)	5(5)	30(28)	0(0)	1(1)
餅つき	33(31)	62(58)	10(9)	1(1)	1(1)	0(0)
恵比寿講	28(26)	8(7)	36(34)	31(29)	4(4)	0(0)
盆踊り	27(25)	45(42)	34(32)	1(1)	0(0)	0(0)
祇園祭	20(18)	9(8)	40(37)	33(31)	4(4)	2(2)
孟蘭盆	13(12)	3(3)	21(20)	69(64)	0(0)	1(1)
やしょうま	12(11)	21(20)	32(30)	40(37)	1(1)	1(1)
秋祭り	12(11)	7(7)	25(23)	59(55)	4(4)	2(2)
孟蘭盆入り	11(10)	5(5)	21(20)	68(64)	1(1)	1(1)
宵の節句・節句	9(8)	6(6)	31(29)	56(52)	0(0)	5(5)
名月（9月）	8(7)	7(7)	22(21)	69(64)	2(2)	1(1)
名月（10 月）	6(6)	5(5)	33(31)	62(58)	0(0)	1(1)
七五三	5(5)	65(61)	6(6)	30(28)	0(0)	1(1)
ものづくり	5(5)	3(3)	9(8)	88(82)	0(0)	2(2)
八十八夜	4(4)	4(4)	43(40)	54(50)	2(2)	0(0)
花祭り	3(3)	9(8)	40(37)	53(50)	2(2)	1(1)
お薬師	3(3)	1(1)	28(26)	74(69)	0(0)	1(1)
春祭り	2(2)	6(6)	38(36)	58(54)	3(3)	1(1)
二十三夜さま（8 月）	2(2)	1(1)	24(22)	79(74)	0(0)	1(1)
初午	2(2)	0(0)	15(14)	87(81)	1(1)	2(2)
かかしあげ	1(1)	3(3)	12(11)	90(84)	0(0)	1(1)
二十日正月（みそか）	1(1)	1(1)	28(26)	75(70)	1(1)	1(1)
地蔵盆	1(1)	1(1)	20(19)	84(79)	0(0)	1(1)
二十三夜さま（9 月）	1(1)	1(1)	18(17)	86(81)	0(0)	1(1)
新嘗祭	1(1)	0(0)	19(18)	83(76)	0(0)	4(4)
風まつり	1(1)	0(0)	10(9)	95(89)	0(0)	1(1)
かまあげ・かりあげ	0(0)	3(3)	11(10)	92(86)	0(0)	1(1)
とうかんや	0(0)	3(3)	11(10)	91(85)	0(0)	2(2)
山の神	0(0)	1(1)	16(15)	86(80)	3(3)	1(1)
おくにち	0(0)	0(0)	15(14)	90(84)	0(0)	2(2)
御射山さま	0(0)	0(0)	14(13)	92(86)	0(0)	1(1)

の飾り物を作る行事をいう。・・・飾り物を作るから物作りというように一般には理解しているが、本来は農作物を作るさまを年の初めに演じて、豊熟の予祝を行うのがもとであったといわれ、北安曇郡小谷地方でも、物づくりのことを一名、作り始めとも呼んでいる」[3]と記されている。

(5) どうろくじん

どうろくじんの実施率は約3割（34%）で、経験率は約7割（67%）、認知率も約7割（72%）で、行事を知っていると回答した学生は経験がある学生が多い行事であった（表3）。また、名称が異なるとして、「どんど焼き」と書いた学生が26人、「三九郎」と書いた学生が6人いた。

どうろくじんは、「子供達が集まって正月の主連縄や松飾りを道祖神のところに集めて焼く火祭り」[4]とあり、地域によって様々な呼び名がある。「どうろくじん焼き」（善光寺平から飯山方面、大町）、「どんど焼き」（北信、東信、諏訪、上伊那）、「三九郎」（松本平から南安曇）、「さんちょ焼き」（木曽谷南部）、「ほんやり」（伊那谷南部）、「おんべ」（大町）など[4]。また、自由記述「行事食の心に残る思い出」で、1番多く回答が得られた行事であり、多くの学生が学童期に地域の行事として経験する機会を得ていると考えられた。一方、地域で呼び名が違い、質問項目の名称と自分の地域での行事の名称が異なっていたために、「知らない」という回答者が3割いたのではないかと思われた。

(6) 二十日正月（みそか）

二十日正月（みそか）の実施率は1%であり、経験率は2%で、認知率も3割（30%）と低い値であった（表3）。

二十日正月は、「正月の終わりとなる節目の日。家中の飾りを取り、セイノカミに集めて焼く。…『佐久市誌』には「骨正月」の記述がある。他には、エベスコ、アラ正月、二十日年取りなどの呼び方もある」[4]とされる。

(7) 節分

節分の実施率は約8割（76%）と高く、経験率も99%、認知率も100%と高い値であった（表3）。

節分は、立春の前日に「イワシの頭などを戸口にかざり、豆まきをして厄除けとする」[4]と記されている。近年では関西の習慣である、節分に恵方巻きを食べる習慣の認知が全国的に高まり、巻き寿司を食べるようになっている[5]と思われる。

(8) 山の神

山の神の実施率は皆無（0%）であり、経験率も1%と低く、認知率も約2割（20%）と低かった（表3）。

山の神の祭りは、作った弓矢、洗い米をお供えし、山の神を祀る。祭りの日には山仕事を禁じられるところもあった。山の安全と、無病息災を祈願するお祭りである[6]と記されている。

(9) 初午

初午の実施率は2%と低く、実施率と同様、経験率も2%と低く、認知率も約2割（19%）と低い値であった（表3）。

初午については、初午祭り（各地の稲荷神社で2月の最初の丑の日に実施）や、わら馬ひきの行事を、ドウロクジンとかハツウマ、ウマヒキなどと呼び、わら馬が災厄を背負って天へ昇っていくのだということ、また、初午祭りは子供の成長を祈る祭りでもあった[4]と記されている。

(10) やしょうま

やしょうまは、長野県や青森県、新潟県、群馬県など東日本の各地で作られる団子または餅[3]で、長野県では全域で作られている行事食ではない。よって、実施率は約1割（11%）で、経験率は約3割（31%）、認知率は約6割（63%）であった（表3）。

やしょうまは、「『やしょんま』、『やせうま』」とも。釈迦の涅槃の日（入滅、死んだ日）。北信に多い。地域によっては三月十五日のところもある。『やしょうま』（米粉で作った菓子）を作り供える習慣がある」[4]と記されている。

(11) お彼岸（春）

春のお彼岸の実施率は、55%と半数近くであり、経験率は75%で、認知率は9割（93%）と高い値であった（表3）。

春のお彼岸については、「春彼岸。（十八日～二十五日頃）」[4]、「ぼたもちなどのお供え物をし、墓参りをする」[4]と記されている。

(12) 桃の節句

桃の節句の実施率は4割（40%）であり、経験率は約7割（74%）、認知率は9割（90%）であった（表3）。調査対象のほとんどが女子学生であったこともあり、経験率は7割以上と高い値であった。なお、桃の節句という行事名で尋ねたので、「ひな祭り」で尋ねれば認知率がさらに上がったのではないかと思われた。

桃の節句は、「ひな祭り（上巳の節句・桃の節句）女の子の成長を願う年中行事」[4]であり、お雛様を飾り、甘酒やひし餅、あられなどを供える[4]。また、「かつては、県内の多くの地域では一月遅れの四月三日に延ばすのがならわしでした」[4]と記されている。

(13) 花祭り

花祭りの実施率は3%と低く、経験率も約1割(11%)と低く、認識率は5割(50%)であった(表3)。なお、花まつりの「やりたい」を選んだ回答者の2人はそれぞれ「やったことはない」、「知らない」も選んでおり、複数回答として処理した。認知率は5割と半数を占めたが、経験率が低い行事であった。

花祭り(8日)は、「灌仏会(かんぶつえ)。釈迦の誕生日。寺では甘茶を誕生仏にそそいで、花祭りをする(南信)。五月八日に行うところもある」[4]、「地域によっては以下の呼び方をする地域もある。降誕会、仏生会、オシャカサマノヒ、オヤクシサマ、オヨーカ、ウズキヨーカなど」[4]と記されている。

(14) 春祭り

春祭りの実施率は2%であり、経験率は約1割(8%)、認知率は約5割(46%)であった(表3)。なお、春祭りの「やりたい」を選んだ回答者の2人はそれぞれ「やったことはない」、「知らない」も選んでおり、複数回答として処理した。認知率は5割と半数を占めたが、経験率が低い行事であった。

春祭りは、「本格的な春の到来に向けて、農耕の予祝の祭り、五穀豊穣・怨霊追放などを祈願した祭りがおこなわれます」[4]と記されている。

(15) 八十八夜

八十八夜の実施率は4%であり、経験率は約1割(8%)、認知率は5割(50%)であった(表3)。認知率は5割であったが、経験率が低い行事であった。

八十八夜(二日頃)は、「まゆ玉を供え、おはぎを作る(上田市)」[4]、「八十八夜は春から夏に移る節目の日で、夏への準備をする決まりの日にあたる。立春から八十八日目」[4]と記されている。

(16) お薬師

前述の花祭りの月遅れの行事のことであり、実施率は3%、経験率は4%と低く、認知率も約3割(31%)と低い行事であった(表3)。

(17) 母の日

母の日の実施率は8割(81%)と高く、経験率も94%と9割以上であった。認知率も100%で、学生にとって大変なじみのある行事であった。

母の日は、アメリカでは20世紀初めにアンナ・ジャービスという女性が亡き母をしのび教会で参列者にカーネーションを配ったことから母の日ができました。このことが日本にも伝わり母や家族へ感謝の気持ちを伝える日とされている[7]。

(18) 宵の節句・節句

宵の節句・節句の実施率は8%と低く、経験率も約1割(14%)と低く、認知率は約5割(48%)であった。(表3)。

宵の節句・節句とは、月遅れの端午の節句。平安時代、貴族が匂いの強い菖蒲を軒に飾り邪気を払う日であった。江戸時代に男の子の節句に発展し、鯉のぼりを飾るなどの祝い方の原型が完成。菖蒲湯に入るのは災いよけの習慣の名残である[7]と記されている。

(19) 父の日

父の日の実施率は約7割(69%)で、経験率が85%と、母の日と同様、認知率が高い(99%)行事だった(表3)。なお、母の日に比べると、経験率が約1割、低かった。

父の日は、アメリカのジョン・ブルース・トッドという女性が母親を亡くし、6人兄弟の1人として父親に育てられ、1909年亡き父の墓前にバラを供え、父親に対する感謝を表そうと「父の日」の制定を提唱したことに始まるとされている[7]。6月の第3日曜に行われ、日本には1950年頃から広まり始めたとされる[7]。

(20) 祇園祭

祇園祭の実施率は約2割(18%)で、経験率が約3割(26%)、認知率は約7割(69%)であった(表3)。地域によって、開催日や名称が異なるため、実際より、低い結果となったのではないかと考えられた。

祇園祭について、「夏の厄病を祓う祭りとして祇園祭りがおこなわれる。御輿が出て、花火があがる。夏祭り。そうめんを食べる」[4]と記載されている。

(21) 土用の丑

土用の丑の実施率は約5割(48%)で、経験率が76%と高く、認知率も93%で9割以上と高い行事であった(表3)。

「土用」とは、「雑節」の季節の区切りのうちの1つで、立春、立夏、立秋、立冬の前の18日間のことをいう。特に夏の土用はウナギだけでなく、うどんや梅干しなど「う」のつくものを食べると夏バテをしないと記されている[7]。また、土用の丑の日にウナギを食べる習慣になったのは江戸時代からといわれる[7]と記されている。

(22) 盂蘭盆入り

盂蘭盆入りの実施率は1割であり、経験率は15%で、認知率も36%と低い行事であった(表3)。

盂蘭盆は、7月13日～16日のところもあるが、長野県では多くは月遅れの8月13日から16日である[4]。盆灯籠、盆提灯をかけ、お盆棚(写真1)に位牌、お盆花、キュウリの馬とナスの牛(写真2)

などを作り供える[4]と記されている。

キュウリの馬やナスの牛には、仏様がキュウリの馬に乗り足早にこの世に帰ってきて、ナスの牛でゆっくりとあの世へ帰るという願いがこめられているといわれている[4]。

写真１　盆棚（長野市鬼無里）

写真２　キュウリの馬とナスの牛（長野市鬼無里）

(23) 盂蘭盆（うらぼん）

盂蘭盆の実施率は１割程度（12%）で、経験率は15%、認知率も36%と低い値であった（表3）。長野県内では、一般的にはお盆と呼んで実施されており、迎え盆、送り盆の結果（表3）を考慮すると、盂蘭盆の実施率も経験率も認知率も、実際には得られた結果より高いことが考えられた。質問項目の「盂蘭盆」が呼び慣れている「お盆」ではないため、別の行事だと考えたためではないかと推察された。

盂蘭盆はお盆ともいい、中国から伝わり、先祖の冥福を祈る。お盆に作られる料理としては、天ぷら（県内全域）、おはぎ（全域）、ナスのおやき（長野）、キュウリの酢の物（飯山）、やたら（飯山）、饅頭の天ぷら（諏訪、伊那、飯田、天龍）などが記されている[3),4)]。

(24) 七夕

七夕の実施率は35%で、経験率は83%と高く、認知率も99%と高い行事であった（表3）。

七夕は、「五節句の一つ。短冊に願い事を書き、笹の葉に飾る。・・・地域によっては七夕に人形を飾る。・・・七夕飾りには夏の野菜も供えた。飾った笹は八日の早朝、川に流した。七日の夕方に流す所もあった」[4]、「笹は祖霊が宿る依代と考えられていた」[3]と記されている。

(25) 迎え盆

迎え盆の実施率は８割（76%）と高く、経験率も約９割（89%）と高く、認知率も高い結果（96%）となった（表3）。

迎え盆の迎え火については、８月13日の晩に「御霊を迎えるために墓や門口で、ムギかカンバ（白樺の皮）などで、迎え火をたく。ヒャクハッタイと呼ぶ百八本のたいまつを、墓から家までの道々にともす所（下伊那、木曽）もある」[4]と記されている。また、「花を供え、お茶、てんぷら、ごはん、ソーメン、なすの鉄火、ささげの煮物、えごなども盆棚の仏様にお供えする」[4]と記されている。

(26) 盆踊り

盆踊りの実施率は25%で、経験率は約７割（67%）と高く、認知率も99%で学生によく知られた行事であった（表3）。

盆踊りは、15日の前後に「盂蘭盆に御霊を供養したりするために、各地で盆踊りが踊られる。盆行事と念仏踊りが合体したものといわれる」[4]と記されている。地域によってさまざまな特徴がある[3]。

(27) 送り盆

送り盆の実施率は75%と高く、経験率も85%と高く、認知率も96%（表3）で、迎え盆と同様、実施率が７割以上、経験率も高い行事であった。

送り盆について、16日、15日夜のところもあり「盆棚の供物を川へ持っていって送る。かつては川に流していた。」[4]と記されている。

(28) 二十三夜さま（８月）

二十三夜さま（８月）の実施率は2%と低く、経験率も3%と低く、認知率も約３割（26%）と低かった（表3）。二十三夜さまについては、「二十三夜の月は、勢至菩薩（せいしぼさつ）の化身と考えられます。勢至菩薩は阿弥陀如来の脇侍を勤める菩薩様で知恵を司る仏様です。二十三夜に勢至菩薩を念ずれば万劫の罪が滅するという俗信があり、二十三夜待ちはこの二十三夜の月の出を待ち勢至菩薩を祭る行事でした」[8]と記されている。

(29) 地蔵盆

地蔵盆の実施率は1%で、経験率も2%と低く、認知率も約２割（21%）と低い行事であった（表3）。

地蔵盆については、「地蔵盆とは子どもの守り神として信仰されているお地蔵様を、子どもたちが詣

でてその加護を祈るならわしであり、8月23日、24日に行われる。お盆の時期に重なっていたことから『地蔵盆』と呼ばれるようになった。お地蔵様を洗い清め、新しい前垂れを着せ、灯篭を立て、供え物をしてお参りする。京都、大阪など関西地方において特に盛んである」[7]と記されている。

(30) 御射山(みさやま)さま

御射山さまの実施率は皆無（0%）であり、経験率も皆無（0%）であった（表3）。また、認知率も14%で、全項目で最も低い結果となった。

御射山さまについては、すすきの太い幹の部分から箸を作り、穂の方は神に供える。この箸で赤飯や小豆飯、うどん、そばなどを食べて使った箸は川へ流す。こうすることで腹を病まない[6]と言われている。また、御射山祭りとして、諏訪神社の神事ともされ[3]、ミサヤマの仮屋を作り、すすきの穂を神に供え祭りをする。諏訪大社周辺の人々は子どもが二歳になるとこの祭りに連れて行き、厄落としと言って生きたドジョウやウナギを近くの川へ放す[6]と記されている。

(31) 風祭り

風祭りの実施率も経験率も1%と低く、認知率は約1割（11%）で、全項目の中で1番低い結果であった（表3）。

風祭りについては、「二百十日に風祭りをする。二百十日は、その前後に風雨が荒れ狂うため、地区の神社で祈るところが各地に見られた。」[4]、「赤飯とてんぷらを作る（飯山市、佐久市ほか）」[4]と記されている。

(32) 名月（9月）

名月（9月）の実施率は7%であり、経験率は14%、認知率は36%であった（表3）。なお、「やりたい」を選んだ回答者の2人が「やったことはない」、「知らない」も選んでおり、複数回答として処理した。

名月については、長野県下では旧暦8月15日、9月13日、10月10日の三回月見をするところが多かった。それぞれ十五夜・中秋の名月、十三夜・後の月見・豆名月、十日夜・稲の月見などと呼び、三回行うことからサンヅキなどとも呼ぶ。団子を作ったり、餅をついたりして、ます・箕・窯のふたなどにのせて月の良く見える屋根の上などに出して供える[6]と記されている。

(33) お彼岸（秋）

秋のお彼岸の実施率は、春と同様、55%で、経験率は約7割（68%）と高く、認知率は約9割（88%）と高い値であった（表3）。

秋のお彼岸については、「お彼岸。（二十日頃～二十六日頃）」[4]、「だんごや油揚げ、餅、蕎麦を仏壇の供え、墓参りをする。仏の日ともいう」[4]と記されている。

(34) 二十三夜さま（9月）

二十三夜さま（9月）の実施率は1%で、経験率も2%と低く、認知率も約2割（19%）と低い値であった（表3）。

(35) 秋祭り

秋祭りの実施率は約1割（11%）、経験率が約2割（18%）と低く、認知度は45%と半数近くから回答された（表3）。なお、「やりたい」を選んだ回答者の2人が、「やったことはない」、「知らない」も選んでおり、複数回答として処理した。

秋祭りについては、「収穫を前にして、収穫への感謝、無病息災や祖霊供養などの祭りがおこなわれます」[4]と記されている。収穫祝いが長野県内各地域で行われていることが推察されるが、地域によって名称や実施される日時が異なるため、学生の経験率や認知率がこのように低い値になったのではないかと推察された。

(36) 名月（10月）

名月（10月）の実施率は6%であり、経験率は約1割（11%）と低く、認知率は約4割（42%）であった（表3）。

(37) おくにち

おくにちの実施率も経験率も皆無（0%）であり、認知率は16%と低い値で、学生にあまりなじみのない行事であった（表3）。報告書[5]でも、重陽・菊の節句として調査した結果、認知率は8%、経験率も3%と少なく、同様の結果が得られている。

おくにちとは、「おくんちともいう。重陽の節句を秋祭りの日とする風から、尊んでお九日(くにち)といったもの。供日、宮日と書く風もある・・・東日本では、九月九日のほかに、十九日・二十九日をもオクンチという」[3]と記されている。また、重陽の節句については、菊の節句として、「菊には長生きをする効能があるとされることから、重陽の節句は邪気を祓い長寿を祈る節句とされる。また、秋の収穫を感謝する収穫祭的な意味合いがある」[4]、「御先祖様に菊の花を供え、その菊の花を酒の中へ入れて飲む（諏訪市、塩尻市奈良井）。他に、秋の収穫祭と習合して、おくんち、くんちなどの呼び名がある」[4]と記されている。

(38) かかしあげ

かかしあげの実施率は1%で、経験率も4%と低く、認知率は16%と、学生にあまりなじみのない

行事であった（表3）。

かかしあげについては、「稲の収穫には三つの祭りがある。刈り入れに先立つ『穂かけ』祭り、稲刈りが終わった時の『かりあげ』祭り（旧暦十月十三日）、次いで稲を脱穀する『こき上げ祝い』の祭り（十月下旬）の三つである。・・・『かりあげ』は『かかしあげ』（長野市七二会）、『カマあげ』、『カマ休め』（伊那市）とも呼んだ。この行事は『トオカンヤ（十日夜）』、『かかしあげ』、『大根の年取り』『えのこ（亥の子）』（北信）とも呼ばれた」[4]と記されている。

写真3　かかしあげのお供え（長野市鬼無里）

(39) かまあげ・かりあげ

かまあげ・かりあげの実施率は皆無（0%）で、経験率は3%、認知率は14%で、全項目中、3番目に低い値で、学生にあまりなじみのない行事であった（表3）。

(40) とうかんや

とうかんやの実施率は皆無（0%）で、経験率は3%で、認知率は15%と低く、学生にあまりなじみのない行事であった（表3）。

とおかんやとは、十日夜と記し、旧暦10月10日に「稲刈りが終了し、田の神様に感謝する祭り。田のかかしを祭り、『案山子様ご苦労様でした』と餅やダイコン、うどんを供える。かかしの月見ともいう（上伊那南部から下伊那にかけてはみられない）」と記されている[4]。

(41) 七五三

七五三の実施率は5%であり、経験率は66%であり、「かつてはやった」の回答が61%と全項目で一番多かった（表3）。また、認知率は72%だった。幼少期に経験したことが多い、なじみの深い行事と推察された。

七五三は、3歳、5歳、7歳という節目ごとにこれまで子どもが無事に育ってくれたことを神様に感謝し、これからの健康と幸福への願いをかけることと儀礼が結びついたとされる。赤飯を内祝いとしてお祝いをいただいた家に配るとされている[7]と記されている。

(42) 恵比寿講

恵比寿講の実施率は26%で、経験率は33%であったが、認知率は約7割（71%）と高い結果であった。

恵比寿講は、「えびす様にいわしやさんまを供え、お神酒、赤飯、甘酒、焼き餅等をお供えする」[4]、「七福神の一つである『えびす様』は、漁業商業の神様だが、農村では農耕神として信仰された」[4]と記されている。

(43) 新嘗祭（にいなめさい）

新嘗祭は、実施率も経験率も1%と低く、認知率は24%と低かった（表3）。

新嘗祭は、「十月に引き続き収穫を感謝し、家内安全を祈願する祭り。」[4]「もともと天皇がその年に収穫された稲を神に感謝する宮中行事。11月23日に、天皇が新穀を神に献し、自らも食して収穫を感謝し、翌年の豊作を祈りました」[4]と記されている。

(44) 冬至

冬至の実施率は約6割（57%）で、経験率は73%と高く、認知率も93%と高い、学生になじみのある行事であった（表3）。

冬至は「二十四節気の一つ。かぼちゃを食べる。地域によってはカボチャと一緒にこんにゃくを食べるところ（佐久市）もある。また、アズキや野菜を入れた粥を食べるところ（長野市稲葉、松代）、カボチャと大根を煮るところ（下伊那郡）もある」[4]と記されている。

(45) 餅つき

餅つきの実施率は約3割（31%）で、経験率は約9割（89%）と大変高く、認知率も99%で高く、学生に大変なじみのある行事であった（表3）。

餅つきは、「（12月20日過ぎから30日頃までの間）29日はクモチ（苦餅）といって嫌う地域が多い」[4]と記されている。

(46) 松飾り

松飾りの実施率は44%で、経験率は66%、認知率は87%で、実施率は半数に満たないが、経験率や認知率は比較的高い行事であった（表3）。

松飾りは12月23日頃から28日に行い、「松は神木とされ生命力をあらわした。大晦日に作るのは『一夜松』といって嫌われた。・・・松飾りは神棚、恵比寿様、荒神様、水神様、廐、土蔵、便所、物置などに飾る」[4]と記されている。

(47) おせちづくり

おせちづくりの実施率は6割（60%）、経験率は約8割（81%）で、学生の8割がおせちづくりを経験しており、認知率は100%と大変高い結果であった（表3）。

おせちづくりについては、「節供（せちく）ということば自体が、神に供える食物を意味していたが、中でも正月は最も重要なお節句であるから、正月の正式食膳をオセチというのは自然である」[3]と記されている。

(48) お年とり

お年とりの実施率は65%で、経験率は8割（80%）、認知率は約9割（91%）であった（表3）。お年とりもおせちづくりと同じように、実施率も半数以上、経験率も8割と高い値であった。

お年取とりは、「年棚・神棚にお灯明、お神酒、お供え餅をあげ、家の内外の松飾りをしているところへもちを供える。仏壇へお灯明、餅を供える。・・・他に大晦日、大年、年取りともいう」[4]と記されている。

お年とり魚については、「一般に、北信・東信は鮭、中信、南信は鰤という傾向がある」[4]と記されている。

写真4　お年とりのお飾り（麻績村）

写真5　恵比寿様へのお年とりのお供え（麻績村）

(49) クリスマス

クリスマスの実施率は94%で全項目中、最も高く、経験率は100%、認知率も100%と高く、今回の調査で、最も学生にとって伝承されている年中行事であった（表3）。

クリスマスは、イエス・キリストの誕生日である12月25日の行事で「キリスト（救い主）のミサ」という意味でクリスマスと呼ばれるようになった[7]と記されている。

(50) バレンタインデー

バレンタインデーの実施率は85%、経験率は97%、認知率は100%であり、実施率も、経験率も、認知率も高い結果が得られた（表3）。

バレンタインデーについては、3世紀ローマ帝国の皇帝が兵士に結婚を禁じ、それに反発した司祭が2月14日に処刑され、その後その日を愛の日として、欧米ではカードを贈りあう。日本では、菓子会社の宣伝をきっかけに、女性から男性へチョコレートを贈るようになった。[7]と記されている。

(51) ハロウィン

ハロウィンの実施率は約5割（52%）で、経験率も66%と高く、認知率は100%でクリスマスやバレンタインデーと同様、大変高い結果が得られ、ハロウィンは学生によく知られた年中行事となっていた（表3）。ハロウィンは、祭りの夜には死者の霊が家に帰ると信じられた、古代ケルト人の祭りに由来しているとされ、この祭りがキリスト教にとりこまれ、キリスト教の祝日である「万聖節」の前夜として10月31日に行われた。子どもたちがおばけの扮装をしてお菓子をねだるお祭りとして広められた[7]とされる。

(52) 51の年中行事のまとめ

51の年中行事について考察する。まず、実施率については、クリスマス、元旦、バレンタインデー、母の日、節分の順に高く8割以上が、行事を行っていると回答した。また、上位5つの行事の認知率は100%であり、経験率も90%以上と高いことがわかった。

認知度が100%と高い、クリスマス、元旦、バレンタインデー、母の日、節分、おせちづくり、ハロウィンは、全国的に広く行われている行事で、メディアで季節になると行事を取り上げ、関連の商品や、販売する店舗を取り上げ、行事について知る機会や、関連する食事や商品を目にする機会が多いことが認知率や経験率の高さに関係していると推察される。なお、平成22年の報告書[5]では、正月、クリスマス、年取りの認知率が100%、経験率も99%以上であっ

表４　行事食の思い出について（自由記述）

行事名	思い出
正月	毎年祖母の家に行き、年越しをして、手作りのおせちを食べていた。
	おせち料理を母と一緒に作っています。
	おせちを家族で作ること。
元旦	毎年必ず鯉こくと焼き鮭を食べる。
	自分の出身は大阪なので、長野とは全然違うお雑煮で驚いた。
	毎年年に一回、母のお雑煮を食べるのがとても楽しみ。普段のお味噌汁とは一味違う味つけがとても好き。小さい頃、お年玉をもらって、美味しいお雑煮を食べる時がすごく幸せだな、と思った記憶がある。
	一年間の中で一番ご飯がおいしいから。家族はすごく楽しみにしています。
	毎年、親戚で集まっておせち料理を食べている。
七草	毎年、母が七草粥を手作りしてくれるのがおいしくて良い思い出です。
	七草粥が好きなので、この時期にはいつも楽しみにしていました。
どんど焼き	母と一緒におもちをこねて、いろいろな形（だるま、まゆなど）に作るのが面白かった。母は、いろいろな色を作ってくれたので、とても面白かった（紅、黄、緑、白）。
	おもちを焼くときに、自分のお餅がわからなくなってしまった。その結果、自分のお餅じゃない、まずいお餅を食べるはめになってしまった。
	習字の紙（書いてあるもの）を焼く際、炎の中にいれて、すぐ灰が空に上がった人は字がうまくなるという言い伝えがあった。
	地区の行事で、おもちを焼くのが恒例だった。
	餅のようなものを長い枝に何個か刺し、それを焼いて食べていた。
	近所のみんなが、木や鉄の棒の先に枝分かれさせておいた細い棒の部分を作り、そこへやしょうまと良く似ただんご（マユの形）を刺して持ちより、大きな火をたいて習字紙などもやしたところに、だんごをかざして焼いた。近付きすぎると熱いが、焼きたてのだんごの味が大好きだった。
	町のどんど焼きでは、毎年無料で豚汁を食べられるから楽しい。
	地域ごとに集まり、みんなでまゆ玉を焼き食べる。
三九郎	朝寒い中準備をして、夜はまゆ玉を焼いて食べておいしかった。
	まゆだま作りが楽しくて、焼くと美味しくなるのが面白かった。
	小学校の頃のイベントで、寒い中、ものがら集めをしたり、作ったりして大変でした。まゆだまはおいしいです。
節分	年の数だけ豆を食べること。自宅では落花生を投げて食べていました。
	毎年恵方巻きを食べる。
	恵方巻きを、その年の方角を向いて食べた。
	お母さんが鬼になって豆をまいた。
	毎年太巻きを家族で食べるのだが、願いを込めながら食べ終わるまで話してはいけないのに、毎年おじいちゃんがしゃべりだすこと。
	毎年手巻き寿司をして方角を向いて食べる。
豆まき	毎年お父さんが鬼になってやって、そのあと年の数だけ食べた
やしょうま	おばあちゃんと毎年一緒に作るのが楽しみ。
	児童センターでやしょうまを作った。それまで知らなかったので、あまりおいしくないし、なんだこれはと思った。
	A 保育園に通っていたので、やしょうまをやらされていた思い出があります。意味はあまり今でもわからないのですが、やしょうまは最初はおいしいと思うのですが。のちのち飽きて、かぴかぴになってしまったことが思い出です。一体どんな行事なのでしょうか。
桃の節句	食事もかわいらしくなっていた。
	行事食かはわからないけれど自宅でいちごのショートケーキを何度か作ったことがあります。
ひな祭り	すごい大きい（高さ 3.5 mくらいの）ひな壇を飾るのが楽しかった。
	ちらし寿司がおいしかった。
	私の地元（山梨）ではひな祭りが 4 月 3 日に行われます。誕生日も近かったので、4 月にまだ雛人形を飾りながら誕生日を祝ってもらっていました。

行事名	思い出
母の日	花を贈った。
	高2くらいの母の日に、母が好きなモンブランを作ってプレゼントした。母はとても嬉しそうにしてくれて、他の家族も喜んでくれて、嬉しかったのが印象に残っている。
祇園祭	小さい頃に家族で電車に乗って、祭りに行ったのが楽しかった。
土用の丑	ウナギが美味しかったです。
迎え盆	地域がご先祖に関わる行事に厳しく、料理は決まっていないけど、それぞれの家の代々のご先祖が好きだったものを全て作ります。
お盆	おばあちゃんと天ぷらを揚げて仏壇？に供えた。
	天ぷらを初日に食べて、最終日はおやきを食べます。毎年祖母と作るのが楽しいです。
送り盆、迎え盆	迎え盆の時にはお墓に行き、線香に火をつけると「盆さん盆さんこの煙に乗っておいでおいで」、送り盆の時には家の近くの橋へ行き、わらを燃やして「盆さん盆さんこの煙に乗ってお帰りお帰り」という声掛けて、迎えたり送ったりしていた。
	おやきをお母さんが作ってくれて、盆踊りした。
名月	お月見団子を祖母と一緒に作って、テレビなどで見て憧れていた盛り方をしたことが、一番記憶に残っています。
道祖神	わらで型作りはおとながやってくれるけど、周りに飾るだるまとかは子供達が集めて、終わったらみんなで豆のおにぎりを食べていました。
餅つき	家族と一緒にもちを作ったこと。
	祖父母の家で機会を使って餅つきをしました。つきたてのお餅が美味しくて食べすぎました。
	青森の祖父母の家に行ったときに、朝早くからお餅をついている音が聞こえてきて、祖父と祖母がお餅つきをしていました。妹と一緒に手伝った思い出があります。
	つきたてのやわらかいもちを、そのまま食べた。
	毎年祖母ともちつきをします。昔はもちが手につかないように使った粉で遊んでいて、服を汚していた事を覚えています。
おせち料理	毎年年明けに家族や親戚で集まって食べる
	毎年、年末は祖父母の家に行き、元旦にはおばあちゃんが作ったおせちを食べました。おばあちゃんの作るおせちはとても美味しくて、年に一回食べられることを楽しみにしていました。
	祖母と一緒に全種類作った。
	祖母と作った。
お雑煮作り	おばあちゃんに教えてもらって作った。あの味を引き継ぎたい。
大晦日から元旦にかけて	大晦日に父と二人で福岡にいた時は、毎年市場でお節の食材を大量に買い出しに行っていたこと。端から端まで全てまわって、前が見えないくらいの箱をもって家に帰ると、笑いながら「買いすぎ」と怒っていた母が、毎年楽しそうにお節を作っていたこと
クリスマス	毎年枕元にプレゼントを置いてくれていて、とてもワクワクした記憶があります。
	毎年プレゼントは隠されていたので、朝起きてすぐ家中を走ってプレゼントを探していました。自分が頼んだ物がくるとは限らなかったので、毎回何がくるかすごく楽しみにしていたことを覚えています。
	毎年枕元にプレゼントが置かれていて、朝起きるのが楽しみだった。サンタさんが窓から入ってこられるように、窓のカギを開けて寝ていた。
	鶏食べたり、ケーキ食べたり、プレゼントをもらったり、楽しいことばっかりだった。
	ケーキを一から作って、家族でクリスマスパーティーをした。
	毎年お母さんが全部手作りでケーキもごはんも作ってくれるから。
	誕生日が近いため同日にやるので、市販のものや普段あまり食べないものが出てくるから。
	小学生の時に友達と一緒にケーキを作った
バレンタイン	小学校の頃好きな人が4、5人いて、みんなにチョコを渡したことがある。誰が本命かわからなかった（笑）。
	中学生の時にもらったチョコ。
	好きな人に頑張って作ったから。
	好きな人にあげました！
安市	K店が出す甘酒や、S店が出す栗しるこがおいしかった。
ほお葉巻き作り	木曽地域で作られているほお葉巻きを祖父母と一緒に作った。

た。

一方、とうかんや、かまあげ・かりあげ、おくにち、御射山さま、山の神の実施率は0%であり、経験率も0～3%以下と低い結果であった。認知率も19%以下と低かった。これらの結果から、稲作に関わる祭りや行事の実施率、認知率や経験率が、著しく低下していることが明らかとなった。一方、母の日や父の日など、生きている家族を思う行事については、メディアの影響などもあり、比較的実施率も高く、経験率、認知度も高い結果が得られた。また、盂蘭盆、どうろくじん、宵節句・節句、おくにちなど、質問項目の行事名が、学生によっては知らない、聞いたこともない単語であった様子もうかがわれた。また、各家庭で行う行事に比べ、「祭り」等の地域の行事については、さらに実施率、認知率、経験率が低い行事の多い傾向が認められた。

なお、調査対象者について、専攻が異なることによって、実施率、経験率および認知率に差があるのではないかと考えられたが、今回、そのような傾向が見られなかったので、まとめて解析した。学生の育った地域や、家庭による差の影響が大きいと感じられた。

2）自由記述について

行事食について心に残る思い出を自由記述で尋ねた結果、107名中72名から自由記述が得られた。結果を表4に示した。なお、表現は、原則学生が記載した通りとした。一部、ケアレスミスや個人情報に抵触すると考えられる内容については、訂正やイニシャル等で示すなど記載を変更した。

72名中、どうろくじんについての記載が最も多く11件だった。次いで正月（元旦含む）が8件、クリスマスについて7件の自由記述が得られた。

「おせち料理を母と一緒に作っています（正月）」、「母と一緒におもちをこねていろいろな形（だるま、まゆなど）に作るのが面白かった（どんどやき）」など、家族や地域で手作りすること、一緒に食事をすることが、楽しい、嬉しい、思い出に残るという内容の記述が多くみられた。バレンタインデーのように個人で行われている行事に対し、やしょうま、餅つき、正月、おせち料理、雑煮などについては、「毎年祖母ともちつきをします（餅つき）」「祖母と一緒に全種類作った（おせち料理）」など、祖父母や親戚等との関係が記載され、家族間の行事であることが感じられた。そして、そういう家族間で行われた行事や食事が思い出として強く残っていると感じた。

4. おわりに

今回の調査では、51の行事について実施率、経験率、認知率について調査対象者に回答してもらったが、実際にどのように各行事を行っているのか、行事についてどのように認知しているのか、いつころまで、行事をどのように行っていたのかなど、具体的なことについては調査していない。よって、伝承の詳細については明らかになっていない。

また、長野県内には「ほお葉巻き」作りなど地域特有の行事もあるので、今後は、調査対象者の出身地についても調査して、長野県出身者と県外出身者に分けて分析する、長野県内も地域に分けて分析するなど、地域性についてのより丁寧な検討が必要であると感じた。

年中行事については、変わらず今後も実施されていくものもあれば、これから廃れていくものもあるであろう。今回の研究をさらに発展させ、小中学生やその保護者世代及び高齢者を対象に年中行事の実施状況をより具体的に調べ、また、各年中行事についての詳細な文献・現地調査も並行して行い、日本の食文化を豊かに継承かつ創造する食育に役立つ基礎資料を得るよう、調査研究に努めていきたい。

謝　辞

アンケート調査に快くご協力いただきました、平成27年度入学長野県短期大学生活科学科健康栄養専攻、平成26年度入学生活科学科生活環境専攻及び平成26年度入学幼児教育学科の学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

参考文献

1）江原絢子・石川尚子編：『日本の食文化』アイ・ケイコーポレーション（2009）142-143頁
2）佐々木輝雄：『「年中行事から食育」の経済学』筑摩書房（2006）3-5頁、166頁
3）鈴木棠三：『日本年中行事辞典』角川小辞典（1997）86頁、210頁、295項、501頁、526-532頁、548頁、583-584頁
4）財団法人　八十二文化財団：『信州の年中行事と食　人々のくらしと川－水系をめぐる食文化－』（2007）34-43頁、49-62頁、66-85頁、91頁、93頁、144頁
5）佐藤晶子：平成21～23年度　日本調理科学会特別研究「調理文化の地域性と調理科学」報告書　－行事食・儀礼食－、日本調理科学会「調理文化の地域性と調理科学」特別研究委員会（2011）78頁

6）長野県民俗の会：『写真記録・信州に生きる　下巻祭りと伝統行事編』郷土出版社（1993）54-55 頁、204-206 頁
7）石田繁美：『家族で楽しむ　日本の行事としきたり』株式会社ポプラ社（2005）16 頁、40 頁、96 頁、106 頁、128 頁、154 頁、155 頁、178 頁、192 頁、214 頁
8）二十三夜待ち：日刊・こよみのページ
〔URL:http://koyomi.vis.ne.jp/doc/mlwa/200810210.htm〕

（平成 28 年 4 月 4 日受付、平成 28 年 5 月 23 日受理）